

# フランス語

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

### 1 前 文

令和3年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）(2)の「フランス語」は、共通テスト(1)と同様の内容・形式で実施された。

事前の具体的な情報が与えられなかった共通テスト(1)とは異なり、共通テスト(2)の受験者は、共通テスト(1)の問題を見てから受験することが可能であり、同様の内容・形式での出題を予想しつつ試験に臨むことができたはずである。その点で、多少なりとも精神的な負担は軽かったものと想像できる。

受験者数が少なかったため、平均点は公表されていない。

出題形式については、冒頭で述べたように、共通テスト(1)と同様であった。

具体的には、発音、書き換え、文法、対話文、整序作文、情報収集、読解という内容で、それぞれの基礎力、応用力を見るのに適したバランスの良い問題であった。

共通テスト(1)の報告書でも述べたように、この出題の配列は、外国語学習のプロセスと重なるようにも思われ、発音から学び始めた学習者が、最終的には論説的な文章を読むことができるまでに至る道筋が示されているようでもあり、これから学び始める生徒にとっては目標の可視化と言えるし、すでに学んでいる生徒にとっては自分の現在地を知る上での参照点になるはずである。

更に子細に見るなら、第3問、第4問では、共通テスト(1)とは異なる品詞・事項を問うことによって、共通テスト(2)の受験者が有利にならないような（換言するなら、相対的に共通テスト(1)の受験者が不利にならないような）配慮が感じられた。これは、前述したように、共通テスト(2)の受験者には心理的なアドバンテージがあったと言えることを考えれば、適切な措置と言えよう。第7問Aの問題では、ウェブサイトでTシャツを注文するという、現代の高校生にとって身近であろう内容が扱われた。選択肢としてイラストが使用されるのが数年来の慣例であるが、今回のイラストには機知に富むフランス語が使われており、出題者の方のユーモアのセンスに敬服した。第8問は、フランスの若者の政治に対する意識をテーマにした文章であった。共通テスト(1)と比べて内容が難化している印象は否めないが、これも、従来の追試験が多少、本試験よりも難しくなる傾向が感じられたのと同様で、やはり必要な措置と言えよう。

### 報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の4点を分析の中心とする。

- ・ 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、ということを特に検討したい。少人数の集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが、御理解を賜りたい。
- ・ 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったか。
- ・ 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。
- ・ フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

### 2 試験問題の内容・範囲など

第一外国語としてフランス語を選択学習する高校生の学習環境の変化（学習時数の減少）を考慮

した問題作成を希望している。

共通テスト(1)と同様、従来の第2問の形式の問題がなくなり、従来の第4問の形式が第3問と第4問にまたがり使われ、整序作文問題の配置が第8問から第6間に移ったという変化があったが、主な形式と内容はともにほぼ大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）を踏襲した形であった。

第1問 フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。基本ルールを問う問題に限る傾向は望ましい。

問1では母音の組合せの音、問2は鼻母音を含む音を問う問題。問3は子音cの例外を問う問題、問4には語末の子音fを発音するかどうかが出題された。問5は恒例のリエゾンを問う問題だったが、出題語はどれも基本語で解答は難しすぎない。

第2問 従来の第3問Aで出題されていた内容で、発音に加えて、形容詞の変化、派生語の知識、動詞の活用などを扱ういわば総合的な文法問題である。問1は過去分詞の形、問2は動詞の直説法現在活用形、そして2問続けて派生語を問う問題（問3は動詞から名詞、問4は形容詞から名詞）、問5は接頭辞による反意語を問うものだった。取り上げられている単語のレベルは中等教育のフランス語学習に十分適合していると思われる。

第3問 文中の空所に適語を入れる形式で、文法や語法の理解度を測る問題。

問3は不定詞の直接目的語としてのquoiが出題された。基本語の扱いとしては難易度が高いが他の選択肢からの消去法で解答できる。

他の問題は基本事項を扱っている適切な問題であったと評価できる。（問1は現在分詞の用法、問2は中性代名詞、問4は日程を表す表現、問5は接続法を導く表現、問6は仮定に続く結果節の動詞活用を問うもの、問7は前置詞の働き）

第4問 第3問に引き続き文中の空所に適語を入れる同じ形式で、語彙の理解度を測る問題。このタイプの問題は、多義語（日本語でもフランス語でも）が出題されると難易度が上がる。問1（日本語の「計測する」に当たる表現がフランス語では多種類あること）、問2（多義語mettreの熟語）、問4（正解③partの使用範囲の広さ）がそのような問題として挙げられるが、学習者が混同しがちな語彙への注意喚起となる良問だった。

また問5は日本語とフランス語間で文の構造が異なる文が出題されたが、続く文のje vais le laisser tomberの理解も同時に問われ、語彙の理解の深さが測れる設問だった。

問3と問6は、状況に応じた形容詞の使用にスポットが当てられた。

第5問 対話文を完成させる問題であり、これも例年どおりの出題であった。問題作成には手間と時間をかけている様子が見られる。受験者がシチュエーションを汲めればトラブルの少ない問題であろう。実際、使われている語や表現は基本的なものが大部分であった。問2は、空欄直後の肯定的なあいづちが、条件法を使った表現（正解①）に続くものと理解するのは難しいが、他の選択肢を選べないという判断で消去法で正答に至る。

4技能の総合的な育成が求められている中で、会話体としての出題にもますます工夫がされていることと推察する。ただ、問4の空欄直後の受け答えにあるun peu trop originalの表現は、un peuがあることで、つまりtropは元々否定的な表現であることを察せられるとはいえ、時にtropが冗語的に肯定の強意として使われていることを聞きかじりしている学習者には、否定か肯定かどちらに捉えるべきか逡巡したと思われる。【報告の方針(1)「(抜粋)知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか。」】という点で大きく逸脱するものではないが、今後も、受験者の実力を素直に推し量れる出題にとどめていただければ幸いです。

第6問 和文仏訳で、自らの考えを述べる自由作文の前段階として文法や構文を中心とした作文

力を問う問題である。並べ替えの語あるいは語句の単位は6個、問うのは4番目の語(句)というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。そのような問題に当たる問4にしても、主語が提示されていることで、基本語empêcherを丁寧に扱えば正解に至る。また問1のJ'aime mieux + inf. や問3のje me permets de + inf. の表現が、特に語順を問う際に文法的に難易度が高くなるとはいえ、自分の心の機微を示す表現として、学習者に重要性を伝える良問だったと思う。全体的に、基本的な表現の出題だったと評価する。

第7問 情報処理能力を問う出題で与えられた情報から判断し発信できるか問われている。

A 「オリジナルTシャツの注文サイト」の案内文を読み取る問題であった。平易な表現であった。

B 「ある町のレストランガイド」と内容に関する会話文が出題された。全体のレベルは中等教育のフランス語学習に適合しているが、情報とそれに関する会話内容にやや冗長さを感じた。

第8問 文意を捉えられているかの理解レベルを細かく測れる長文読解問題である。全体の中では難問で、配点も高い。今回は「フランスの若者の政治離れとその鍵となる学校教育」が題材だった。フランスの高校生の実情と問題点が語られ、日本とも若者の政治離れという点では共通する一方、中等教育における政治の扱いという点では日仏は大きく異なる現状があり、結論への興味の持続が期待できる出題だった。ただ、問6(日本語)や問7(フランス語)の選択肢により読解が助けられる面があるにしても、本文中で繰り返されるl'engagement social et politiqueの解釈を知らない(解釈に関心がない)受験者が、問8で問われたタイトルにこれを選ぶ(問8正解②)のは容易ではない。他の選択肢についても①のle gouvernementや③のla politique de l'éducationなど、誤って受け取りかねない語が並び、難しい出題だったが、まさに受験者世代の関心と呼び起こす必要性を感じる内容で、問題作成にも工夫のある良問であった。

### 3 結 び

今回も難問奇問はなく、発音、語形変化における不規則なものについても、当然知っておくべき範囲にとどまり、またフランス語の運用能力を幅広く問うという点でも、共通テスト(1)の試験を踏襲した問題作成であったと評価できる。

前文で触れたように、今回の大学入試共通テスト(以下「共通テスト」という。)から出題順が一部変更された。全体を見ると、「発音→語彙→基本文法→連語・構文→対話文→整序問題・作文→実用的な文書の読み取り→論説的文書の読み取り」という展開になっていることも共通テスト(1)の報告書で述べたとおりである。これは、基本から応用へという内容上の観点からも、音声・語彙の単一要素から文、さらには文章という複合体へという文法論的観点からも、現在・未来の学習者にとって示唆に富む配列と言えよう。

また、共通テスト(2)は受験者が少なかったため、平均点が公表されない程であった。けれども、すでに見たように、問題の内容、形式は共通テスト(1)同様、適切なレベルを維持しつつ、バランスの良い出題であった。それだけではなく、これも繰り返しになるが、共通テスト(1)の内容を踏まえて、重複を避ける配慮も必要であったはずであり、共通テスト(2)の問題作成には、より一層の困難が伴ったと想像される。

あらためて問題作成委員の先生方に心よりの感謝を申し上げる次第である。

共通テストは、昨年までのセンター試験を踏襲して、高等学校教科担当教員の意見・評価をこのように述べる機会を与えていただき、それを踏まえて問題作成部会の見解が表明される試験である。

この点で、共通テストは他に例を見ない試験と言える。

こうしたことは、大学の個別試験では有り得ないことであり、あらためて共通テストの意義の大きさを指摘しておきたい。

前述したとおり、これまでのセンター試験の知見を踏まえて作成される共通テストは、第一義的には学習者である高校生にとっての目標であることは言うまでもないが、同時に、高校の教員にとっても、指導上の有益かつ信頼のおける目標となっている。高等学校学習指導要領がない中、手探り状態で日々の指導をする（英語以外の）外国語教員にとって、センター試験及び共通テストという膨大なコーパスは、必要不可欠な教材の宝庫なのである。

したがって、高校現場からの希望を申し上げれば、この共通テストを多くの大学に個別試験として活用していただきたい。ひとつには、過去に「フランス語」を入試科目から外された大学に、いまひとつには、現在、外国語としては「英語」のみを入試科目としておられる大学に、共通テストの「フランス語」の活用をお願いするものである。

今後も引き続き、「フランス語」の共通テストが存続することを切に願う次第である。

## 第2 問題作成部分科会の見解

### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。  
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR 等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。  
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

これまでの大学入試センター試験における問題作成の大枠と良問の蓄積を受け継ぎ、基本的知識を問う問題と思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスを配慮し、従来の問題の数、配列、配点を見直した。具体的には、語彙問題の数を減らし、設問形式も語彙知識を直接問うものから語句の用法に基づいて正解を導くものに変更し、語彙問題減少分を読解問題に重点化して配分した。また、大問の配列を、発音、文法、語彙・表現、整序作文から意味内容、読解へと問題の漸進性に配慮して変更した。

なお、フランス語の表記は従来の正書法に従っているが、近年フランスの学校教育に導入された新たな正書法と齟齬が生じないように配慮した。

#### 第1問 発音問題

つづり字の読みを通して、「聞く、話す」能力の基礎となるフランス語の発音に関する基本的知識を問う問題である。つづり字と発音の関係の理解度を試すために、できるかぎり多様な出題を心がけた。語の選択に当たってもなるべく多様なものとなるよう心がけた。リエゾンについての知識を問う問題では、語句レベルのみならず、文中でのリエゾンも積極的に扱うこととした。基本的な発音の規則を正確に把握していれば容易に正解に到達できるものと思われる。

問1は«ueil», «euil», «œil», «eil»の発音を識別する問題、問2は«an» «en»の発音を問う問題、問3は«c»の発音を問う問題、問4は語末の«f»を問う問題、問5は例年どおり、リエゾンについて問う問題であった。

#### 第2問 語形変化の問題

語形変化を文法・語彙・発音の知識と関連付けて問う複合的問題である。できるだけ多様な品詞・発音にわたって出題するよう配慮した。高校側の意見を尊重しつつ、文法、発音、つづりに関する基礎的な知識を広く試すよう努めた。

問1はrésoudreの過去分詞を問う問題であった。問2は名詞crainteから動詞craindreを導き出し、さらにその活用形を問う問題であった。問3は代名動詞se blesserから名詞blessureを問うものであった。問4は形容詞rapideから名詞rapiditéを問う問題であった。問5は動詞plaireの反意語déplaireの接頭辞を問う問題であった。いずれも受験者が間違いやすい基本的な文法、発音、つづりを問う問題であり、適切な出題であったように思われる。

#### 第3問 文法の問題

文法に関する基本的知識を問う問題である。基本的な文法事項を、偏ることなく、広く問う多様な問題の作成を心がけた。また、他の問題と同様、問題文についても、実際に使われる自然なフランス語になるように配慮した。

いずれも基本的な文法事項を問う問題であるが、中性代名詞を問う問2、不定法の目的語を問う問3、動詞の活用を問う問5、結果節の時制を問う問6に比べると、現在分詞を問う問1、日付の表現に定冠詞leを使う問4、前置詞の働きを問う問7がやや難しかったと思われる。

#### 第4問 語彙・表現の問題

基本的な言い回しや慣用表現・熟語に関する知識を問う問題である。語句の意味を直接問うのではなく、与えられた文脈の中で語句の働き・用法を理解しているかどうかを問う問題とした。

« mise en vente »の意味を問う問2、「occupée」を選ばせる問3、「à part」の意味を問う問4、文脈から動詞« fatiguer »を選ばせる問5、「distraite」の意味を問う問6は比較的難易度が低く、「pèse」を選ばせる問1は比較的難易度の高い問題だった。

#### 第5問 対話完成問題

与えられた会話の一部から、日常生活における自然な状況を判断し、対話を完成させる問題である。具体的で想像しやすい場面や状況を設定しつつ、内容が多様なものになるよう心がけた。また、できる限り明解なフランス語による表現を採用した。さらに、会話の一部だけを読んで正答を導くことができる問題ではなく、会話全体を読まなければ正解に至ることができない問題を作るようにした。

問1は、会話の展開を丁寧にたどっていけば、比較的容易に正答に到達できる問題であった。しかし、「c'est gentil」以下を正しく理解できていないと誤答に至る可能性があった。問2は、選択肢の内容を理解していれば、比較的容易に正答に到達できる問題であった。問3については、会話の状況が理解しやすかったため、正答を導きやすい問題であった。問4は、会話文で使われている表現、「un peu trop original」を肯定的に理解するか、否定的に理解するかによって、誤答を選んだ可能性が考えられる。問5は、使用されている語彙によって、会話の状況が理解しやすい平易な問題であった。

#### 第6問 整序作文問題

例年の出題形式・傾向にならい、日常的で平易な日本語を、基本的な語彙・表現によるフランス語に言い換える能力を見る問題である。整序作文の形式により、与えられた語句を用い、自然なフランス語の文を組み立てる力を問うている。問題の日本語文は、自然でありながらも、正答を導きやすいものとなるよう配慮した。

正答率と識別力を考慮して、下線の数を6か所とし、偶発的な正解を排除するようにした。

いずれも適切な難易度の出題であったが、問1は、周期性を表す定冠詞leがやや難しかったのかもしれない。問3について、se permettre deという表現は基本的なものだが、比較的複雑に映った可能性が高い。問4は、無生物主語でフランス語らしい表現だが、empêcherの目的語を理解していれば、容易に正答に至ることのできる問題であった。

#### 第7問 資料・会話読解問題

図表等を用い、日常生活や身近な問題に関連したフランス語の知識・能力を問うとともに、それに基づいた思考力・判断力・表現力等を試すための問題である。高等学校学習指導要領の改訂を踏まえ、高校生にとってより自然でなじみやすい内容となるよう心がけた。また、図表等を用いた資料に基づく適量な分量の文章または会話を取り上げた。AとBの中間に分かれ、別々に示された図表と会話を関連付けながらフランス語の資料を読み解く能力が求められて

いる。Aは「オリジナルTシャツの販売サイト」、Bは「レストランガイド」を読み取る問題で、バラエティのある出題となるよう工夫をこらした。

#### 第8問 長文読解問題

論旨が明快で論理に一貫性のある文章を素材として選び、事柄の因果関係や対立などを正確に読み取る力や、文章の流れを論理的にたどる力を問う問題である。近年の方針を踏襲し、高等学校学習指導要領の改訂に対応すべく、なるべく平易な表現、なじみやすい題材を選択するようにした。そのため、本文が複雑になって、論旨が取りにくくなることのないよう十分に吟味した。常識だけで正答にたどり着けるような問題や、単語や成句の知識を問うだけの問題は排除するよう心がけた。また、文章の流れにそって内容全体の把握ができていないかを試す問題を取り入れた。そのために、文章は語彙・文法的に難度の高いものを避けて、より明確に思考力・判断力・表現力等を問うことができる問題となるようにした。

問1は語彙が指す内容を選択する形式で、比較的平易な問題であった。問2も同様に下線部の内容を問う問題であったが、本文の内容と一致しないものを選ぶという問題形式のために難易度が上がったものと思われる。問3～5は語彙を選択する問題であったが、先入観にとらわれず文脈を正しく理解すれば、正答できたものと思われる。問6は下線部の理由を問う問題である。選択肢が日本語であったため、比較的難易度の高い本文の理解を助けることになったと考えられる。問7は本文の内容と一致する文を6つの選択肢から2つ選択する問題であり、本文の正確な読解が求められた。問8は本文のタイトルを考える新しいタイプの問題形式である。本文に出てくるキーワードであるengagementやs'engagerの意味を正確に理解することが求められた。

### 3 ま と め

以上、高等学校教科担当教員から寄せられた意見、令和3年度の「フランス語」の出題意図、問題形式と内容に触れながら、解答結果を検討し、問題作成部会としての見解を述べた。

今後も大学入学共通テストの基本的な考えを踏まえ、高等学校における学習範囲を逸脱しない適切な出題内容を心がけつつ、極度に難易度の高い問題や、出題傾向の偏りを避けるよう配慮して問題作成を継続していきたい。

試験問題に対しては、高等学校教科担当教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いた。あらためて感謝する次第である。